

ピアサポート派遣事例①

ピアサポーターが介入したことで、
福祉サービス利用につながりそうな事例

ピアサポート派遣事例

<ご本人> Aさん(女性)

<依頼のきっかけ>

Aさんがひきこもりがちになっているのを心配した知人(精神障害当事者)が、地域活動支援センターⅠ型相談員に「相談のってあげて欲しい」と相談。

< Aさんの主訴 > 「誰かに話を聴いて欲しい」

→ Aさんご本人からピアサポート派遣依頼

派遣当初の印象

- 本人がピアサポーターとコーディネーター(専門職)に、人間関係の悩みを話す。

「周りの人が自分のことを悪く言っている」

「自分が周りに迷惑をかけている」等。

- マンションで単身生活

ゴミ出しができておらず、洗濯物も山積み

「部屋が汚くてごめんなさい」

→部屋を片付けたい気持ちはありそう？

ピアサポート的なかわり

- 話を聴く中で、Aさんの人間関係への不信感は、Aさん自身が自分の家族から傷つけられた体験が大きな影響を与えていた
→ピアサポーター自身も**家族関係での苦しさがあったことを伝え、
「同じ体験を持っている」**と、共感を伝える。
- かかわる中で見つけた良いところを伝える。
「あなたの良いところを私は知っているよ。」
「人間関係が信じられないけれど、寂しいから助けて欲しいと思って、相談を受けたり行動しているところとか」

部屋の掃除から福祉サービス利用へ

- **「部屋が汚くてごめんなさい」**

→コーディネーターから「気になってるなら一緒に掃除をしてみますか？」と声かけ。一緒に A さん、ピアサポーター、コーディネーターで部屋の掃除をする。

「綺麗になると嬉しい。気持ちよかった。」

- **福祉サービスのヘルパー利用を提案**

→ピアサポーターがずっと掃除をする役割ではないことを伝える。
→コーディネーター・地区担当保健師が連携し、相談支援事業所へつなぐ。

関係がゆらぐ瞬間も

- Aさんは徐々に電話相談できるようになっていたが、相談相手の何気ない一言が気になり、再び他者への不信感が戻る。
- ピアサポーターが家に行くが、なかなか部屋に入れてくれず。
「仕事で嫌々来ているんでしょう。」 「私は人を傷つけない」

＜ピアサポーターの声かけ＞

「私はあなたが思っているほど仕事できて完璧な人ではない」

「私自身も病気があり、死にたい程辛いこともあった」

「あなたに会いたいから来ている」

「あなたと同じなんだよ」と繰り返し伝える。

→その後、Aさんとの信頼関係は戻り、再び訪問を受け入れるようになる。

ヘルパー導入をどうするか？

再び訪問を受け入れてくれるようになったので、専門職(コーディネーター、保健師)はこのままヘルパー導入を進めることを検討。

しかし、ピアサポーターは

「もしかしたら、Aさんは今はその話を進めたくないかもしれない。本当は今やりたくないかもしれないけど、断れない可能性もあるから慎重にしてはどうか？」と当事者視点での意見を専門職へ伝える。

現在、本人の意向やタイミングを丁寧に確認しながらサービス導入を検討中。

本事例まとめ(ピアサポートの効果)

- 孤立している人へ、同じ当事者としての立場から介入しやすく、人とつながる良さを体感してもらえる。
- その結果、生活課題への具体的な介入が可能になる場合がある。
- サービスを利用する過程での本人の迷いや葛藤を、代弁できる。
(単にサービスが早く入れば解決ではない。利用開始するまでも、利用開始した後にも葛藤がある場合も)
- 専門職のコーディネーターが同伴することで、他機関との連携・調整のサポートが可能。